

先端人 カモノハシ 歯の進化探る

ヒトと同じ哺乳類なのに、くちばしを持ち卵を産む「カモノハシ」に魅了された。今は、いろいろな哺乳類の歯の進化を調べている。

カモノハシとの出会いは小学生のころ。科学誌ニユートンの特集を読み、その姿に感服した。大学で哺乳類の研究を始め、イヌやネコの仲間を持つ「切り裂く歯」の進化などを調べた。

でもやっぱり、カモノハシの研究もしたい。そこで、約1300万年前のカモノハシの祖先との違いを調べた。

カモノハシのくちばしは下向きで、歯の代わりに角質の硬い板を持つ。くちばしを水底に突っ込み、獲物が動く時に出る電気の変化を感じて捕食する。だが、祖先のくちばしは上向きで歯がある。「なんだこれは」と研究を進め、

愛知学院大専任講師 浅原 正和さん (37) 進化形態学



静岡県掛川市出身。京都大大学院を修了後、三重大学特任講師などを経て、2017年4月から現職。研究室には、標本の骨や動物のぬいぐるみが所狭しと並び、買い物をしたポイントで集めたカモノハシのぬいぐるみは、同じものが20個以上もある。

祖先は水中を泳ぎながら捕食していたこと、電気をとらえる神経の発達で歯の生える場所がなくなり、硬い板を持つことなどを明らかにした。

また、オーストラリアがカモノハシを英国や米国、日本に贈る「カモノハシ外交」をしていた歴史もまとめた。

ヒトの祖先とカモノハシの

祖先は、2億〜1億6千万年前に分かれた。「カモノハシは、我々の進化を知る生き証人なんです」

アザラシやクジラの歯の研究にも取り組む。「哺乳類の白歯のような複雑な形ができた過程や仕組みを、標本や遺伝子の情報を活用して明らかにしたい」

(木村俊介)